



心臓胸部大動脈手術2000例達成と死亡・合併症発症率について

2025年10月15日、当院心臓血管外科が2011年に発足して以来、心臓胸部大動脈手術が2000例に到達しました。この手術治療を行うにあたり、多くの患者さんを当院へご紹介いただきました先生方、そして当院スタッフの力添えをいただけたことに感謝しております。また、大げさかもしれませんが我々に人生を預けて(賭けて)いただいた患者さんとそのご家族に、やはり感謝したいと思います。

2000例の手術を見返して、どんなに素晴らしいことをやったのか?という視点よりも今回は、どのような患者さんが不幸な転帰をたどったのか?ということが頭から離れずこの1ヶ月はNCD(National Clinical Database)に登録した全データのフィードバック機能を見返し続けました。正直なところ当院は1500例目くらいでいくつかの解決すべき診療課題がありました。当時、これを問題視して改善策を2の手3の手と繰り出し現在に至っているのが現状です。ちなみにNCDは日本国内の外科手術を統括しているデータベースであり、専門医の認定や施設評価のためには登録が必須となっております。

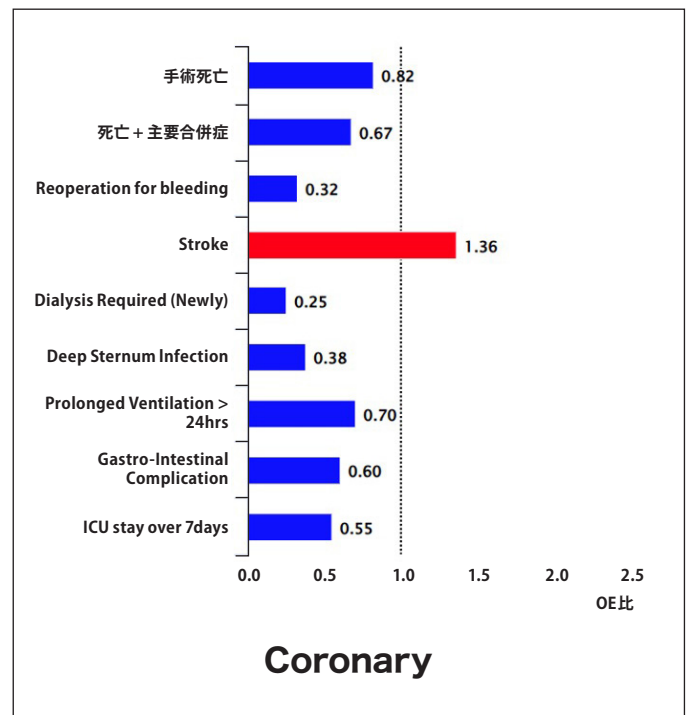
ざっくりとした表現では、術後30日死亡2%、病院死亡が4%、の結果でありました。当然、これは様々な因子で変動する数字ではありますが、ここで大きな参考となるのがNCD feedbackです。術前の患者因子から予測イベント発生率を算出して、はたして全国平均よりも良い治療を行っているかどうか?ということが明確にわかる機能です。

結果としては、Coronary、Valve、Aortaの全分野で「手術死亡」および「死亡+主要合併症」は予測発生率を下まわ

りました。ただ合併症発症の項目ではいくつかが予想イベント発生率を上回る項目がありましたのでこれについて述べたいと思います。

1) Coronary

「Stroke」:術後Afを契機にというパターンが散見された。そのためAf憎し!との想いでAfには敏感に反応して左心耳マネージメントを含めて臨んでいる。その結果、過去2年間、CABG術後の周術期Strokeは発生していない。



裏面に続きます

執筆



友愛医療センター
心臓血管外科 部長

山内 昭彦

山内昭彦ブログ

「日本最南端の心臓外科医日記」

右上のQRコードからご覧ください↑



▲心臓血管外科
ホームページ



▲心臓血管外科
Facebook

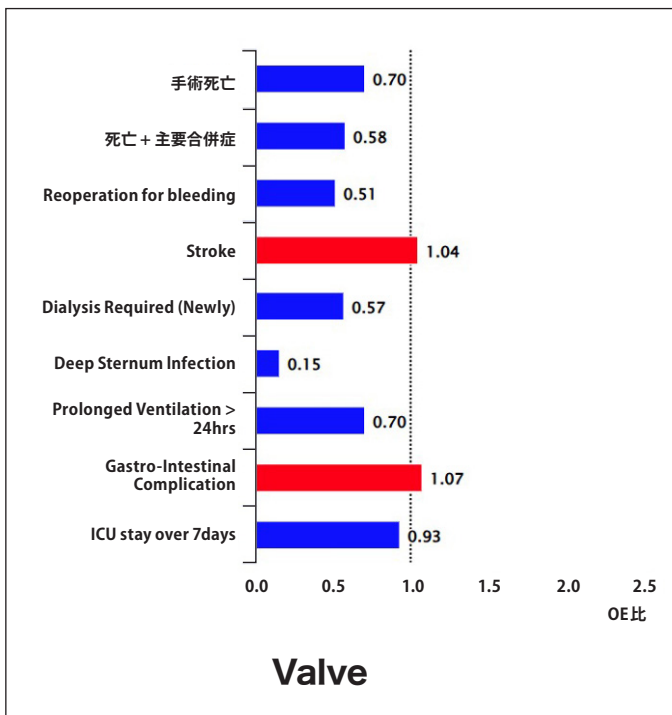


▲心臓血管外科
ダヴィンチを導入

2) Valve

「Stroke」:当院では一時期、IEが非常に多く(多い年には全開心術の10%がIE手術)、その時期にStrokeが集中した。ただし、IE発生予防の啓蒙を他診療科に打診し、啓蒙を重ね減少した。その影響もあってかIEは減少し、過去3年半、Strokeの発生は0である。

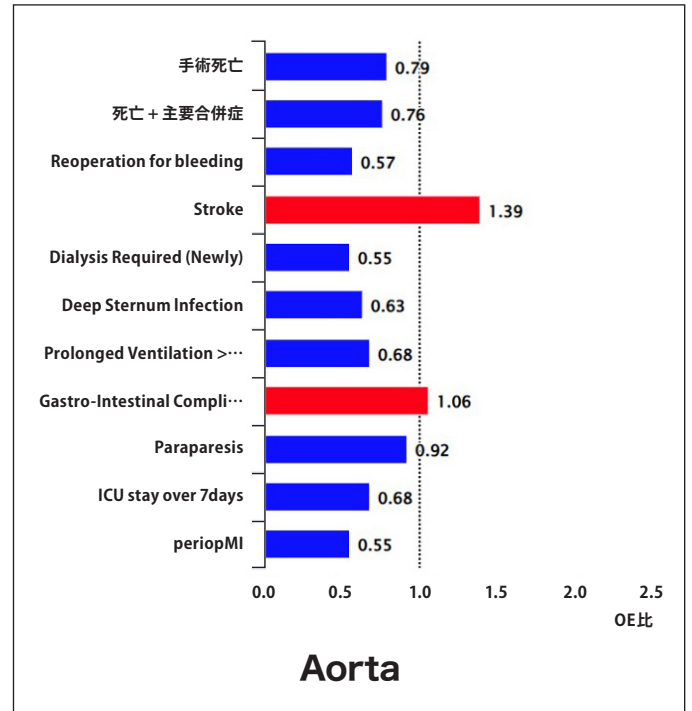
「Gastro-Intestinal Complication」:これには本当に悩んだ時期があった。=NOMI、であり致命的であった。透析患者さんにSAVRを行った時などがなりやすい傾向から、リスク因子を分析していまではNOMIを起こしそうな患者さんの予想と、そういった患者さんに対する周術期対応策を確立した。その内容を周術期に関与するスタッフと共有し、過去2年間はNOMIの発生0となった。



3) Aorta

「Stroke」:これは未だある一定の割合で発症しているのが現状である。急性A型解離や胸部破裂症例増加によるところが大きく、後述するGastro-Intestinal Complicationにも関連している。いかに早く手術台に患者さんに乗せるかが最重要であり、院内体制およびその心がけを継続しながら改善策を試みている。

「Gastro-Intestinal Complication」:これも胸部大動脈関連のショックバイタルによるところが大きい、来院時点からの腹部臓器虚血症例が単純に増加している。早期治療介入が絶対であるが腹部外科との連携、カテーテル治療、等の集学的治療を行い減少傾向にある。少なくともNOMIは減少した。



最後になりますが、2000例の手術においてMICSは399例でありました(20%)。2015年から開始したこともあり全体では20%ですがここ5年は年間40%と増加傾向です。この399例中、病院死亡は4名(1.0%)でありました。

外科医は自身、もしくは自施設の成績について良い数字も悪い数字も知っておく必要があると考え開設当初から今に至っております。特に自身の行った手術治療の悪い面に目を向けることは重要であり、目を向ける謙虚さがあれば打開策はあると考えます。今後も患者さん、スタッフ、ご紹介いただく先生方からの問いに真摯に答える(応える)ことができるよう、循環器チームをあげて精進していきたいと思っております。